

うれしい！楽しい！もっとやりたい！「英語でフリートーク」

防府市立松崎小学校 寺内 健

1 はじめに

私は、「子どもたちが、より多くの人の考えや生き方にふれ、自分の考えとの違いを楽しみ、これからの人生を豊かにしてほしい」と願って子どもたちに日々接している。この願いを実現するために、小学校では、「より多くの人の考えにふれる機会を、各教科領域で設けること」が必要である。そして、各教科領域の中でも、「英語の授業で、英語を使って考えを伝える機会」をもつことが、将来、日本語を母国語としない人たちの考えや生き方にもふれることができるようになるきっかけづくりにつながれば嬉しい。

そこで、英語の学習を通して、「何を知ることができ、どんなことができるようになったか」といった自己の変容を自覚すること」が、主体的に英語で思いを伝えようとする子どもを育むことにつながると考え、以下の視点を意識して学習を進めていった。

- ア) 即興的に質問をできるよう、支援を繰り返し行うこと
- イ) 自覚した自己の変容を、子ども同士で共有すること

2 実践報告

- (1) 単元名 英語でフリートーク ～Let's talk about my dream.～

『We can!2』 Unit8 What do you want to be?

- (2) 単元のねらいと概要

子どもたちは、毎時間の導入時に、子どもたちの生活や学習内容に合わせて、教師が設定したトピックで、Small Talk に取り組んできた。毎時間続けていると、子どもたちの中に、英語での会話に楽しみを見出す子どもが増えてきた。ある日、朝の会で行っているフリートークの振り返りをしていると、一人の子どもが、「Small Talk で学習した語彙や表現を使えば、朝の会で行っているフリートークを英語でできそうだ」と思いをもち、その子どもが他の子どもたちに伝えた。そうすると、他の子どもたちは、その提案に反応を示し、1年生から朝の会で行っているフリートークを英語でやってみようということになったのだ。話題については、本単元のUnit8「What do you want to be?」で、英語のフリートークを行うこととなった。子どもは、一人一人がもっている夢や目標を、互いに知らない。日本語を通じて、夢や目標を知り合う機会をつくるために、「What do you want to be?」「I want to be a～.」の表現を用いて、自分の将来について伝え合う活動に取り組んだ。子どもたちは、英語で会話をするからこそ、心を寄せて聞き合う姿や、互いの夢や目標を知ること、自分の将来についてもう一度考え直す姿を見取ることができた。しかし、自分の思いを英語で話すことに不安を感じている児童も少なくない。以下は、単元を構成する際に意識した2つの視点(ア、イ)に対して行った支援から表れた、子どもの姿である。学級の一人でも多くの子どもが思いを英語で話せるようになるために支援を行ってみた。

- (3) 授業の実際

- ア) 即興的に質問をできるよう、支援を繰り返し行うこと

毎時間導入時に行ってきた「Small Talk」で用いた語彙や表現をまとめた掲示物を、教室の前面に掲示し、それらを参考にして会話をするよう促した

前述したように、子どもの中には、英語で会話することに不安を感じている子どももいる。右のような掲示物を、子どもたちの目のふれるところに掲示することで、会話の内容に応じて、表現を見ながら、表現を自由に選択し、会話を続けられるようになった。以下に掲示物の内容と作成に至った経緯を述べる。



これらの質問は、子どもが授業の導入時に行う「Small Talk」を進めていく中で、子どもが必要感をもった表現である。トピックは毎回、2往復目の質問をしなくなるようなトピックを用意することも心がけた。子どもたちはスモールトークをする中で、「本当は、好きな色をもっと尋ねたかったけれど、どうやって尋ねたらよいか分からなかった」や「相手の得意なことを聞いたかったけれど、どうやって尋ねたらよいか分からなかった」などの疑問をもち、その度に、ALTがその疑問に答え、表現を教えた。しかし、子どもは、「前習った質問の仕方が分からない」「毎回やるけれど忘れてしまう」という子どもの声に対して教師は、「どうしたらよいか。忘れないための方法はあるのかな」と、子どもたちに投げかけた。すると子どもは、「何か手元に質問の書いた紙がほしい」「ずっと目につくような掲示物がほしい」と教師に提案した。子どもの必要感がないのに、教師が掲示物を作成するのではなく、子どもが必要感をもってから、このような掲示物を提示すると、子どもたちは自ら表現を獲得しようとする意欲的な姿が見られた。教師は、質問に使用する表現を少しずつ増やしていき、子どもたちは、その掲示物に載っている質問を見ながら、少しずつ即興的に質問できるようになっていったのである。このように、教師から与えられたものよりも、自ら求めて得た語彙や表現の方が、それらの語彙や表現を使おうとする意欲が高まるのだと感じた。

しかし、掲示物を参考にしようとしても、場面に応じて、どの表現を選んだらよいか分からず、1往復で会話が終了する子どももいる。1往復以上の会話ができるように、以下の2点で支援を加えた。

- | |
|--|
| <p>① 表現を選択して活用している子どもが、選択することに難しさを感じている子どもにアドバイスし、学び合っている姿を教師が見取り、価値付け、共有すること</p> <p>② 2往復目の質問ができた子どもに、掲示物のどの表現を使ったのか問い、どのように掲示物の表現を活用し会話が続けられたのかを共有したこと</p> |
|--|

- ① 子ども同士で、学び合う雰囲気をつくることも授業の中では大切だ。場面によって、使う表現は違うので、その時に選ぶ表現を、教師が一人一人の子どもたちへ助言して回るのは困難である。子どもたち同士で学び合う姿を見取り、価値付けることで、子どもたち同士で、表現を獲得し、表現を増やすことができた。そして、自分たちの力で語彙や表現を獲得できたことを教師が価値づけることで、学び合いに対する自信にもつながったと感じる。



② 同じ場面設定の中で、どんな表現を使ったのかを共有したことで、「次は使ってみよう」「次は〇〇くんのように質問してみよう」というような思いをもつことができた。子どもたちが意識できるようになったのは、場面に応じて尋ねたいのが、「What」「Where」「When」「Which」「Who」どれなのかが、分かってきたことである。その姿として、「What 昼ご飯?」「Which 〇〇or〇〇?」など、「What」「Where」「When」「Which」「Who」が先に表現できるようになった。「この場面では、この質問が使えた」と繰り返し共有することで、場面と表現とをつなげて考えることができるようになったのである。そのような自己の変容を感じている子どもの姿は、イ)で示す。

このように、掲示物を利用しながら会話の内容に合わせて即興的に質問をしたり、相手に反応を返したりしている子どもを見取り、価値付け、子どもと共に学習を進めていくことは、有効であったと考える。

イ) 自覚した自己の変容を、子ども同士で共有すること

一時間の授業の終末に、思いを共有する場を設定した

以下は、英語のフリートークの一部の様子である。※下線は、意見に対する質問

T児: I want to be a baseball player. I like playing baseball.
H児: What team do you like?
T児: I like Hiroshima Carp. K児: What baseball player do you like?
T児: I like Seiya Suzuki.
U児: What Hiroshima Carp do...Hiroshima Carp uniform color do you like?
T: I like blue and red. 限定のやつなんよ。

「like」を使った質問が中心だが、「ぼくたちにも英語でフリートークができた!」「難しいからこそ楽しいな」など、**Small Talk**の学びを生かして、朝の会でのフリートークを英語でできたことに、喜びを感じていた。以下に、英語でフリートークを行った後の子どもたち同士の振り返りを示す。「①できるようになったこと」「②もっとしてみたいこと」で示す。

※「C」は、学級の全体や、数人の子どもたちの反応

U児: 質問がいつもの朝のフリートークより多かったな。
M児: 今日は全体的に、お尋ねが多かったっていう感じで、より深く知れたのは知れたけど、意見が少なかった。そしてちょっと、時間も短かったから、②丸々一時間使って、やってみたい。
教師: あーそうだよ。もっと多くの人意見を聞きたかったってことかな。
N児: M君と少し似てるかもしれないけど、なんか、今日やったときに、ちょっと時間が、足りなくて、まだ、聞いてみたいこととか、たくさんあったし、最後の方になってバツて手が挙がったから②その人たちの意見も聞いてみたいと思って。英語だと、意味が分からなくなっても、①どういう意味かなとか、興味をもつことができ、すごい楽しかったからいいなと思いました。
T児: 今日は、①「お尋ね」でも、すごく英語が使えたから、けっこう楽しかったです。
S児: いつものフリートークとはちょっと違う楽しみ方ができました。
C : うーん (全体が共感)

教師：いつもと違う楽しみ方ってなんですか？

S児：いつもは日本語だけど、なんて言えばいいん？ちょっといつもより違うことが分かった。

C：なんかわかる。(数人が共感)

教師：なんかいつもと違って、難しいんだけどなんか面白いなとか？O君はどう？今手を挙げてたけど。

O児：①日本語で話すよりも難しくて、その難しさが楽しかった。

C：あー。難しいからこそね。(全体が共感)

M児：今日一番盛り上がったのが、T君のときのベースボールプレーヤーで、たぶん、みんなはT君のことをよく知っているから、あんなにたくさんの質問が出たから、知っていることに質問が集まるんだなど。でも、もうちょっと、②あれ(職業が英語で書いてある掲示物)を見て、また授業で、他の人の夢も聞いたり質問を考えたりして
もいいんじゃないかなと思いました。

教師：あれって？

M児：みんなの将来の夢が書いてあるやつ。一人一人言っていたらいいんじゃないかな。

H児：②先生、別の時間でもいいから、またやりたい。全員の思いを聞いてないもん。

教師：もう一回したいのか。

C：はい。

教師：じゃあ、一人一人の思いが聞けるようにもう一回やろうか。

①の子どもの姿は、「できるようになったこと」を自覚している姿であると言える。日頃は日本語で行っているフリートークを、英語でやってみるということは当然、子どもにとって大きな壁となる。しかし、学んだ語彙や表現、小グループでの会話を通してだんだんと自信がつき、最終的には、英語で質問をしたり、自分の伝えたいことを伝えたりできるようになったのである。また、②の「もっとできるようになりたい」という子どもの姿も表れた。フリートークでは、「I want to be a baseball player.」と話した子どもに質問が集中し、5分間のフリートークがすぐに終わってしまった。一部の友だちの思いしか共有できなかったからこそ、「全員の思いを聞きたい」という思いが表れたのだ。このような、思いを共有する場を設けることによって、学び合いの雰囲気作りや自己の成長を互いに感じ合う意識が表れたと考える。

3 終わりに

「英語でフリートークをしてみたい!」という子どもの発想が形になるように、授業づくりを進めてきた。一時間の授業の中で、英語を聞いたり話したりする時間を多く取ることが不可欠であり、英語に触れる時間が長ければ長いほど、自信をもって会話することにつながる。しかし、小学校段階では、中学校以降の英語の学習に意欲がもてるように、「英語を使って思いを伝える喜び」を感じさせたい。そのためには、英語に触れる時間を確保しながらも、英語を使う場面の中で、互いの考えにふれあい、その場面を全体で振り返る場を単元の中で設定をすることも大切にしたい。そうすると、「できるようになったこと」「もっとできるようになりたいこと」を子ども同士で自覚することにつながると考える。学習の中で、子どもが主体的に英語に触れられるよう、これからも工夫していきたい。